

第2回「教員の勤務環境の改善に向けた法制度等の検討」分科会

教員の土曜勤務に係る課題と対応方策

課 題	対 応 方 策	
週休日の振替先確保 (総労働時間の縮減にも留意)	①長期休業期間中に振替先を確保	◇夏季休業期間の検討 ◇校内研修、市町村研修、郡研修、府研修の精選 ◇学校閉鎖期間の延長 ◇3者面談等を長期休業期間中以外に実施 ◇半日単位の取得も考慮
	②課業期間に振替先を確保	◇平日の午後の授業を土曜日に移行し、振替可能日とする。 (同一週内の振替が可能)
平日の過密感の軽減	平日の半日を空き時間	▶または、会議や教材研究の時間とする。(過密感の軽減)
4h勤務を考慮した時程の工夫	◇授業時間・授業時数の短縮等により、12時30分に退勤が可能となる時程とする。	
非常勤講師の勤務条件等の整備	◇年度当初に出勤が必要な土曜日を明示し、平日の勤務時間を減らして週当たりの任用時間数を調整	
ライフスタイルへの影響	◇育児や介護が必要な職員の勤務について配慮が必要	
そ の 他	◇既存の事業や取組を活かし、新規に企画する場合は既存事業の見直し等を検討 ◇事業の形態に応じて、地域の人材をコーディネーター等として活用 ◇人的措置の検討 ◇教員の負担軽減策の更なる推進	

土曜日教育実施に当たっての私学と公立における法制度上の相違点

◇ 学校教育法施行規則第61条において、公立小学校における休業日は、日曜日及び土曜日とされ、「特別の必要がある場合は、この限りでない」と定められている。

【対応策】

- ・学校週5日制の趣旨を踏まえ、地域に開かれた学校づくりを進める観点から実施
- ・教育課程に位置付けられた授業は、法律を逸脱しない範囲として月2回程度を上限(文科省見解)

◇ 労働基準法第32条の4において、労働時間1週40時間の例外として1年単位の変形労働時間制が認められているが、地方公務員については、地方公務員法第58条第3項に適用除外の規定があり、公立学校教育職員については、給与特別措置法に地公法の読替規定があり同様に適用除外となる。

【対応策】

- ・給与条例第33条による週休日の振替又は勤務時間の割振変更を行う。(前4週間、後16週間)

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例

例＜1＞

週時程	平日の授業を土曜日に移動し、平日に2回の午後に放課とする。
勤務	勤務が割り振られない午後の半日と教材研究等に活用できる午後の半日。

活用できる主なモデル例

公開授業、保護者参加型授業、研究発表会、子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)、
防災マップづくり 等

例＜2＞

週時程	平日の授業を土曜日に移動し、平日に1回の午後に放課とする。
勤務	勤務が割り振られない午後の半日又は教材研究等に活用できる午後の半日。

活用できる主なモデル例

公開授業、保護者参加型授業、研究発表会、秋のフェスティバル、
子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)、チャレンジ!体力測定、防災マップづくり
習熟度別補習(+面談・進路イベント等)、土曜振り返り学習(どよスタ) 等

例＜3＞

週時程	平日の6限目の授業を土曜日に移動し、6限の授業を減らす。
勤務	平日の放課後の時間を確保し教材研究や子どもの面談等に活用。

活用できる主なモデル例

公開授業、保護者参加型授業、研究発表会、秋のフェスティバル
子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)、チャレンジ!体力測定、学校招待会、防災マップづくり 等

例＜4＞

週時程	平日の授業時間をそのままにし、放課後の学習活動や体験活動を土曜日に行う。
勤務	平日の放課後の負担感と土曜日の教育活動の負担感を軽減。

活用できる主なモデル例

習熟度別補習(+面談・進路イベント等)、土曜振り返り学習(どよスタ)、文化・スポーツ交流、
〇〇中学校「絆」祭り 等

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例< 1 >

◎ 週時程

- ・ 1週目の「A週」、2週目の「B週」に分け、A・Bの2パターンの週時程を組み合わせて2週間1セットを回す(特定の1週のみでも可)。
- ・ A週の「火曜日5限(11)」「木曜日5・6限(22・23)」をB週の「土曜日1～3限(11・22・23)」に移動させる。
- ・ 週当たりの授業時数は29時間のままB週の火・木曜日の午後を放課とする。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	11
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	22
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	23
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5		16		28	
6	6		17	23	29		6	6		17		29	

◎ 勤務

○同一週内で勤務時間の割り振り変更が可能

→土曜日の4時間の勤務時間の割り振りを、同一週内の火曜日か木曜日の午後4時間の勤務の割り振りをやめる日として設定できる。(土曜の午前出勤→火又は木曜の午後勤務なし)

○半日の放課時間の活用が可能

→火曜日又は木曜日の午後の時間で教材研究の時間に充てることができる。

→火曜日又は木曜日の午後の時間に会議時間を設定し、他の曜日にあった6限終了後の会議を少なくし過密感をなくす。

→夏季休業期間中に実施されている研修を火曜日又は木曜日の午後の時間に開催することで、夏季休業期間の連続した夏季特休・年次休暇取得等を促進させる。

○休暇取得の促進が可能

→火曜日又は木曜日の午後が勤務となった場合でも、教材研究、会議、研修等が終わり次第、時間年休の取得ができる。

※ 課題

- ・ 火曜日又は木曜日の午後に勤務時間を割り振らない場合は、会議や出張を入れにくい。
- ・ 火曜日又は木曜日の午前授業と給食時間が終わった後の放課は1時頃からとなるため、教員によっては、午後の時間に余裕がない。
- ・ 土曜日の登下校、火曜日・木曜日の下校指導等、安全面での配慮が必要となる。
- ・ 火曜日・木曜日の放課後、児童・生徒の過ごし方に工夫が必要か。

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例<2>

◎ 週時程

- ・ 1週目の「A週」、2週目の「B週」に分け、A・Bの2パターンの週時程を組み合わせて2週間1セットを回す(特定の1週のみでも可)。
- ・ A週の「水曜日5限・6限(16・17)」をB週の「土曜日1限・2限(16・17)」に移動させる。
- ・ 週当たりの授業時数は29時間のままB週の水曜日の午後を放課とする。
- ・ 土曜日の午前中から地域の体験活動等への参加が可能。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	16
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	17
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5	11		22	28	
6	6		17	23	29		6	6			23	29	

◎ 勤務

○同一週内で勤務時間の割り振り変更が可能

→土曜日の4時間の勤務時間の割り振りを、同一週内の水曜日の午後4時間の勤務の割り振りをやめる日として設定できる。(土曜の午前出勤→水曜の午後勤務なし)

○半日の放課時間又は午前の2時間程度の活用が可能

→水曜日の午後の時間又は土曜日の放課後で教材研究の時間に充てることができる。

→水曜日の午後の時間に会議時間を設定し、他の曜日にあった6限終了後の会議を少なくし過密感をなくす。

→夏季休業期間中に実施されている研修を水曜日の午後の時間に開催することで、夏季休業期間の連続した夏季特休・年次休暇取得等を促進させる。

○休暇取得の促進が可能

→水曜日の午後が勤務となった場合でも、教材研究、会議、研修等が終わり次第、時間年休の取得ができる。

→土曜日の放課も、特に勤務等がなければ年次休暇の取得ができる。

※ 課題

- ・ 水曜日の午後に勤務時間を割り振らない場合は、会議や出張を入れにくい。
- ・ 水曜日の午前授業と給食時間が終わった後の放課は1時頃からとなるため、教員によっては、午後の時間に余裕がない。
- ・ 土曜日の登下校、水曜日の下校指導等、安全面での配慮が必要となる。
- ・ 水曜日の放課後、児童・生徒の過ごし方に工夫が必要か。

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例<3>

◎ 週時程

- ・ 1週目の「A週」、2週目の「B週」に分け、A・Bの2パターンの週時程を組み合わせて2週間1セットを回す(特定の1週のみでも可)。
- ・ A週の「月曜日6限(6)」「水曜日6限(17)」「木曜日6限(23)」をB週の「土曜日1～3限(6・17・23)」に移動させる。
- ・ 週当たりの授業時数は29時間のままとする。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	6
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	17
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	23
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5	11	16	22	28	
6	6		17	23	29		6					29	

◎ 勤務

○平日の放課時間の活用が可能

→月～木曜日の5限終了後の時間を教材研究や会議、研修等で活用できる。

→5限終了後の時間を活用し、必要に応じて子どもの面談や指導の時間等が、ゆとりをもって設定できる。

○休暇取得の促進が可能

→平日の4日間で、時間年休の取得の可能性が増える。

○平日の保護者や地域との調整時間が可能

→土曜日に行う保護者や地域と連携した体験活動等の打ち合わせが、放課後の時間帯に設定できる。

※ 課題

- ・ 同一週内の勤務時間の割り振り変更ができない。
- ・ 平日を5限終了とするよりも、6限目を適宜活用することで、平日授業のゆとりが図れるか。
- ・ 月～木曜日の放課後、児童・生徒の過ごし方に工夫が必要か。

平日の過密感の軽減を考慮した週時程・勤務の例< 4 >

◎ 週時程

- ・月～金曜日の授業時間数はそのまま、土曜日の教育活動に取り組む。
- ・土曜日に地域の体験活動、補習授業等を午前中に行う。

A週							B週						
	月	火	水	木	金	土		月	火	水	木	金	土
1	1	7	12	18	24		1	1	7	12	18	24	
2	2	8	13	19	25		2	2	8	13	19	25	
3	3	9	14	20	26		3	3	9	14	20	26	
4	4	10	15	21	27		4	4	10	15	21	27	
5	5	11	16	22	28		5	5	11	16	22	28	
6	6		17	23	29		6	6		17	23	29	

◎ 勤務

○平日の放課後の取組を土曜日に実施可能

→平日の放課後に実施されている補習等の学習活動を土曜日に実施し、平日の放課後の時間を教材研究や会議に充てることができる。

→柔軟な教育活動を土曜日に展開することで、1週間の勤務のゆとりが生まれる。

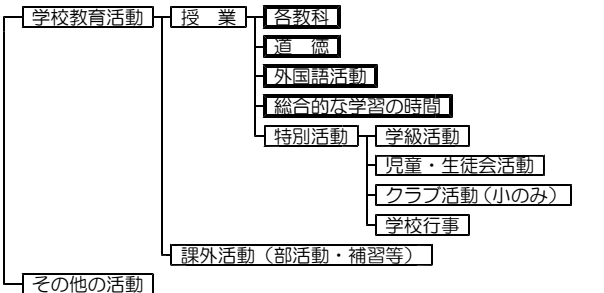
○土曜日の教育活動次第でゆとりの時間

→土曜日の教育活動に保護者や地域の人材の力を借りることで、土曜日の勤務負担が軽減される。

→すべての教員が出勤することなく、教育活動が展開できる。

※ 課題

- ・同一週内に勤務時間の割振り変更ができない。
- ・平日の授業時間については、過密感が変わらない。
- ・土曜日の教育活動について、保護者や地域の人材等との打ち合わせや子どもの事前学習による負担が増える可能性がある。

名 称	公開授業	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ
		全校児童・生徒参加
内 容	対象学年	小、中、高 全学年
	年間回数	3回（学期に1回）～ 6回（2ヶ月に1回）
内 容	<ol style="list-style-type: none"> 1 保護者向け授業参観 各学校で平日に実施している授業参観を土曜日に実施 2 児童・生徒向け授業見学 中学校：通常の授業を土曜日に実施し、地元の小学校高学年が見学 高 校：通常の授業を土曜日に実施し、中学生が見学 3 一般向け公開授業 PTA、学校評議員、他校教職員、地域の関係者等を対象に授業を公開 	
参加形態	<ol style="list-style-type: none"> 1 教員 → 児童・生徒、保護者（参観のみ） 2 教員 → 生徒・他校種児童・生徒 3 教員 → 生徒・保護者・地域 	
そ の 他		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆さまざまな大人の考えや価値観に触れることにより、子どもの学びが深まる。 ◆保護者が子どもの学びの過程を間近で見ることができる。 ◆授業での気づきを家庭で共有することができ、家庭教育向上の契機となる。 ◆授業改善に外部評価を活用できる。 ◆「中1ギャップ」の解消につながる。 ◆開かれた学校づくり、学校と地域の信頼関係構築につながる ◆中学生の進路選択の一助となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆すべての保護者が来校できるとは限らない。 ◆保護者等の参加率向上

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 平日の授業を土曜日に実施することで、月～金曜日の過密感を軽減することができる。 ○ 小学生を引率する教員は、その小学生の在籍校が授業見学を学校行事として位置づけることで、週休日の振替等が可能となり、勤務時間増となる負担感は少なくなる。

- A-2** ①家庭の教育力のさらなる向上
③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称		保護者参加型授業	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 全校児童参加	
		対象学年	小 全学年
		年間回数	3回（学期に1回）～
内 容	<p>平常の授業や環境学習、防災教室などのテーマ学習に保護者が子どもとともに参加して授業を実施</p> <p>◆例：身近な環境問題についてのグループ・ディスカッション 紙漉体験&書道教室 調理実習 日本の歴史すごろく 脳トレカルタ、漢字クイズ、…</p>		
参加形態	教員・保護者 → 児童・生徒・保護者		
そ の 他			

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆さまざまな大人の考えや価値観に触れることにより、子どもの学びが深まる。 ◆保護者が子どもの学びの過程を間近で見ることができる。 ◆授業での気づきを家庭で共有することができ、家庭の教育力向上の契機となる。 ◆開かれた学校づくり、学校と地域の信頼関係構築につながる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆参加する保護者の人数把握や打ち合わせが必要。 ◆すべての保護者が来校できるとは限らない。

教員の勤務負担軽減の観点から
<p>○ 保護者とともに教材作成を行うことにより、教員の準備に要する労力が軽減される。また、保護者との信頼関係が構築でき、他の行事等の協力依頼も円滑に実施できる。</p>

A-4

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化
- ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称		研究発表会	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童・生徒参加	
		対象学年	小、中、高 全学年
	年間回数	3回程度 (学期に1回)	
内 容	<p>保護者や地域の方々に来校してもらい、児童・生徒の学習発表を見学してもらう。</p> <p>◆例 国語：作文、詩、俳句、短歌等の作品の発表 社会：調べ学習の発表 理科：自由研究の発表 英語：暗唱文の発表、スキットの発表 総合：体験学習のまとめの発表 など</p>		
参加形態	教員・児童・生徒 → 保護者・地域		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○内容によって授業時間を弾力化(20～100分等) ○学級単位、学年単位等、さまざまな形態での発表 ○通常の授業で実施しているものを発表 ○1教科だけでなく、複数教科、全教科での発表 ○高校においては、政策提案等のプレゼンテーション等も 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆定期的な授業公開によって授業改善に寄与 ◆保護者や地域の方々に見てもらい、発表に対する評価や感想を得ることにより、児童・生徒の学習へのモチベーションが高まる。 ◆単なる授業参観ではなく、子どもたちの活躍の場を見ることができると、保護者、地域の方の参加、絆づくりが期待できる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆公開のためだけの単発の取組になると学力向上につなげにくい。 ◆発表を中心に年間指導計画を立てると、普段の授業を圧迫してしまう。

教員の勤務負担軽減の観点から

- 授業として実施するので、負担感は小さい。

A-5

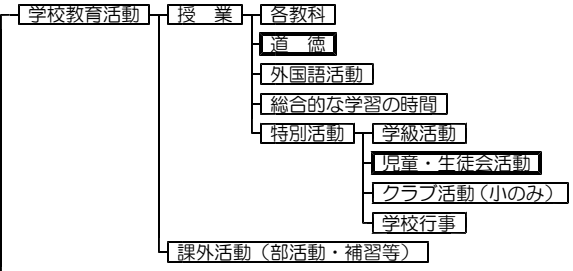
- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化

<p>名 称</p>	<p>秋のフェスティバル</p>					
<p>教育課程内外の位置付け</p>		<p>児童・生徒の参加イメージ</p> <p>該当学年児童全員参加</p> <table border="1"> <tr> <td>対象学年</td> <td>(幼)、小 1・2年生</td> </tr> <tr> <td>年間回数</td> <td>1回</td> </tr> </table>	対象学年	(幼)、小 1・2年生	年間回数	1回
対象学年	(幼)、小 1・2年生					
年間回数	1回					
<p>内 容</p>	<p>教科「生活科」で幼稚園児や保育園児を招待し、保護者、地域の方、園児とともに楽しむ合同授業を実施。事前のオリエンテーションや探検も行う。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆幼稚園・保育園児には「もうすぐ1年生体験入学推進事業」として位置付け ◆オリエンテーション <ul style="list-style-type: none"> ・交流ゲーム等により園児と児童のグルーピング ・合同で秋のフェスティバルを計画 ◆「秋の公園探検隊」 <ul style="list-style-type: none"> ・公園を探検して秋（どんぐり、落ち葉など）を探すネイチャーゲーム ・見つけたものを持ち寄り、遊びコーナーでの遊具等を作成 ・地域の人に「秋のフェスティバル」の招待状をかく。 ◆「秋のフェスティバル」 <ul style="list-style-type: none"> ・地域の人を含め、コーナー遊びを楽しむ。 ・「親のための応援塾」として、秋の食材を利用したおやつ作りも実施 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin-top: 10px;"> <p>※もうすぐ1年生体験入学推進事業とは… 保育所、幼稚園から小学校への円滑な接続を図るため、小学校において次年度の新1年生を対象とした1週間程度の体験入学体験入学等を実施。</p> <p>※親のための応援塾とは… 小学校就学前の子どもを持つ保護者などが語り合い、交流し、学び合うことで子育ての不安や悩みをやわらげ、親同士のネットワークづくりを進める取組。</p> </div>					
<p>参加形態</p>	<p>教員・児童・保護者・園児・地域</p>					
<p>そ の 他</p>	<p>○平日にも「秋のフェスティバル」に関する授業を実施</p>					

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆連続的な取組の設定は、幼稚園教員、保育士と学校教員の指導に対しての共通理解が深まり、幼児と児童の交流も深まる。 ◆幼小の円滑な接続のカリキュラムを考えた体験プログラムや教員の研修が進む。 ◆園児が、ねらいをもって参加できる。 ◆学園児の引率に際し、保護者や地域の協力が得やすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆任命権者の異なる幼稚園教員や保育士の勤務の整理 ◆オリエンテーションから本番までの実施スパンが長くなる場合、幼児、児童の学習意欲の持続が困難

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 当日までの調整、準備の負担もあるが、保護者、地域の協力を得ることにより、負担感は一定軽減できる。 ○ 「もうすぐ1年生体験入学推進事業」等の事業を実施している学校は、ノウハウを活かすことで負担も少なくできる。

- B-3** ①家庭の教育力のさらなる向上
②学校と地域が連携した取組の強化

名 称	子ども見守りウィーク(通学路安全確認DAY)									
教育課程内外の位置付け		<table border="1"> <tr> <td colspan="2" data-bbox="997 280 1391 324">児童・生徒の参加イメージ</td> </tr> <tr> <td colspan="2" data-bbox="997 324 1391 369">全校児童参加</td> </tr> <tr> <td data-bbox="997 392 1070 481">対象学年</td> <td data-bbox="1070 392 1391 481">小 全学年</td> </tr> <tr> <td data-bbox="997 504 1070 571">年間回数</td> <td data-bbox="1070 504 1391 571">1回 (5月中旬から下旬)</td> </tr> </table>	児童・生徒の参加イメージ		全校児童参加		対象学年	小 全学年	年間回数	1回 (5月中旬から下旬)
児童・生徒の参加イメージ										
全校児童参加										
対象学年	小 全学年									
年間回数	1回 (5月中旬から下旬)									
内 容	<p>子どもたちを見守り、登下校時のあいさつを励行する強化週間を設定し、週間中の最初の土曜日に次の取組を実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆登 校：保護者と児童と一緒に登校 ◆1時間目：登校班ごとに通学路の安全マップを作成 ◆2時間目：1～3年：授業参観（道徳・生活科等） 4～6年：非行防止教室 ◆3時間目：児童会総会 ・児童、PTA、地域がそれぞれ取組をアピール ◆下 校：保護者と児童が安全マップを確認しながら下校する。 									
参加形態	教員、児童、保護者、地域									
そ の 他	<p>○登校後すぐの休み時間も作業時間に組入れるなど、授業時間を柔軟化 ○地域の民生児童委員、地区の役員等と連携</p>									

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆子どもとともに通学路を歩くことで、保護者が普段は気づかない危険箇所を確認できる。 ◆地域の方の思いや考えが子どもや保護者に伝わる機会となる。 ◆保護者と子どもが共通の話題で話し合うことができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆大規模校では人数的に全校実施が困難（登下校） ◆登校距離の長短で保護者、児童の取組度合が変化する可能性 ◆保護者が参加できない児童への対応

教員の勤務負担軽減の観点から
<p>○ 当日までの調整、準備の負担もあるが、保護者、地域の協力を得ることができれば、負担感は一定軽減できる。</p>

B-3

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称	チャレンジ！体力測定									
教育課程内外の位置付け		<table border="1"> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">児童・生徒の参加イメージ</td> </tr> <tr> <td colspan="2" style="text-align: center;">全校児童・生徒参加</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">対象学年</td> <td>小、中 全学年</td> </tr> <tr> <td style="text-align: center;">年間回数</td> <td>1・2回 (春・秋)</td> </tr> </table>	児童・生徒の参加イメージ		全校児童・生徒参加		対象学年	小、中 全学年	年間回数	1・2回 (春・秋)
児童・生徒の参加イメージ										
全校児童・生徒参加										
対象学年	小、中 全学年									
年間回数	1・2回 (春・秋)									
内 容	<p>全校児童・生徒の新体力テスト測定、保護者や家族の体力測定を合同で実施する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆教員：主に児童・生徒の体力測定を実施 ◆地域の指導者：年齢に応じた体力測定を保護者やその家族に実施 									
参加形態	教員・地域の指導者 → 児童・生徒・保護者・その家族									
そ の 他	○現状として、体力測定は「学校行事」として位置づけている。									

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆子どもと保護者、家庭が体力や健康について意識を共有することができる。 ◆子どもの体力の状況を保護者が把握し、自らの体力実態を知る機会となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆安全な測定場所の確保 ◆けが等発生時の校内救急体制の整備

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域の指導者の力を借りることなどにより、教員の負担感が軽減できる。 ○ 当日の安全確保のために適正な規模で実施することで、教員の負担を軽減する。

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称	学校招待会	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ 全校児童・生徒参加 (小は低学年除く) 対象学年 小、中、高 小の高学年以上 年間回数 1回
内 容	他校種の児童・生徒、保護者、地域の方等を学校に招待し、各学級・講座の学習や部活動の成果を発表。 <ul style="list-style-type: none"> ◆学校探検ラリー <ul style="list-style-type: none"> ・学校案内マップ、スタンプカードを来校者に配付し、ラリー形式で発表ブースを見学してもらう。 ・授業、部活動における成果物を教室内に掲示し、生徒が説明・発表。 ◆全体説明会 <ul style="list-style-type: none"> ・歓迎演奏、演舞 ・児童・生徒会作成プロモーションビデオの上映 ・児童・生徒による学校紹介 ◆イベント <ul style="list-style-type: none"> ・著名人による教育講演会 ・映画上映会 ・文化祭最優秀演劇発表 	
参加形態	児童・生徒（・教員） → 他校種生徒・保護者・地域	
その他	○児童・生徒の実行委員会で運営し、教員はサポート ○時期・校種によっては、教科として実施することも検討 ○高校では学校説明会とセットで実施	

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆開かれた学校づくりの推進 ◆児童・生徒の活動成果の発表の場を設けることにより、ゴールに向けた系統立てた指導が可能 ◆学校外の人に伝え、評価される体験を通して、自己肯定感をもち、モチベーションの向上につながる。 ◆様々な人と接することにより、コミュニケーション能力の育成を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆大規模校での取組は工夫が必要 ◆すべての生徒を主体的に参加させる工夫が必要。

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 児童・生徒が実行委員会で運営し、教員はサポートにまわることができれば、負担は少ない。 ○ 教科として実施するのであれば、通常授業の学習内で準備等を行うことができる。 ○ 小学生を引率する教員は、その小学生の在籍校が授業見学を学校行事として位置づけることで、週休日の振替等が可能となり、勤務時間増となる負担感は少なくなる。

B-5

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化
- ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	防災マップづくり		
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校児童参加	
		対象学年	小 全学年
年間回数	1回		
内 容	<p>自分たちの住むまちを探検し、身近にある危険な場所や防災施設・設備などを実際に見て回り、その結果を子どもの視点・意見・感性によって模造紙上の地図にまとめ、グループごとに発見したことや気付いたことなどを発表する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆通学路を中心に5～6名のグループで探検 ◆避難場所や危険箇所のチェック・写真撮影 ◆気づいたこと等を地図に落とし込み、防災マップを作成 ◆発表 <p style="text-align: center;">※保護者・地域の方は各グループの引率、各地点での立哨、マップ作成補助等にあたる</p>		
参加形態	教員・地域・保護者 → 児童・保護者		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○地域の地理・歴史等について事前学習 ○3年生以上は「総合的な学習の時間」として実施 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆社会全体の防災意識の向上を図ることができる。 ◆土曜日に実施することにより多数の協力を得られ、学校と地域がつながる一助となる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆毎年同じ内容の場合、マンネリ化が懸念される。 ◆防災の指導に関して、保護者・地域との共通理解の徹底が必要である。 ◆1・2年生の活動を教育課程上のどこに位置付けられるか。 ◆探検時の全校児童の把握が困難である。

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 当日までの調整、準備の負担もあるが、保護者、地域の協力を得ることができれば、負担感は一定軽減できる。 ○ 土曜日公開授業を活用して、子どもたちの事前学習を保護者、地域の方にも参加してもらうことで、負担軽減につながる。

C-1 ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称		習熟度別補習(＋面談・進路イベント等)	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		全校生徒参加	
内 容	<p>習熟度別・クラス別等の講座編成により、教科の補習、作業的な学習、自習等を柔軟に実施するとともに、保護者を含む面談や中高双方向の進路イベント等を開催する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆クラスの枠を超えた習熟度別講座編成による補習 <ul style="list-style-type: none"> ・国語、数学、英語の基礎・標準・発展講座等を開設 ・振り返りや基礎・基本の定着をめざす講座は少人数編成とし、きめ細かな指導を行う ・状況に応じて大学生教育ボランティア等を活用した個別指導 ◆クラス単位の補習 <ul style="list-style-type: none"> ・社会、理科他 ・作業を中心とした学習、自習時間 ・自習等と並行して個人面談や三者（生徒・保護者・教員）面談を実施 ◆複数の高校を招き、進路関係のイベントを実施（学期に1回程度） 	対象学年	中 全学年
		年間回数	20回程度(月2回)
参加形態	教員（・地域） → 生徒（・保護者）		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○出勤する教員数を抑制するには、2時間連続補習などの設定が必要。 ○発展講座はクラス人数を超えた編成とするなどにより、トータルとして講座の伸びを抑える。 ○目的意識をもって臨ませるため、シラバスの事前配付と希望講座の登録などを工夫。 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆成績上位層を伸ばし、つまずきのある生徒をサポートする等、日常の授業ではできない学習指導に時間をかけることができる。 ◆面談の時間を確保することにより、より丁寧な進路指導等、生徒と向き合う時間を確保できる。 ◆他校種の生徒、教職員と触れ合うことにより、進路意識の高揚を図ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆時間割の調整が必要であり、大規模校では実施困難 ◆効果を得るためには月2回以上の実施が必要 ◆中学校での習熟度別講座編成に府民の理解が得られるか。 ◆学習集団がふだんの授業と異なるので、教員が生徒を把握することが困難 ◆面談が多くなると担任の授業が不可能 ◆成績中位層の参加目的が曖昧

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 平日の放課後に実施している補習を土曜日実施とすることで、平日の勤務の過密感解消につながる。 ○ ボランティアを活用することで、対象教科（国語、数学、英語、社会、理科）の担当教員の負担を減らすことことができる。 ○ 平日のイベントを土曜日に実施することにより、教員の負担軽減が図られる。

- C-3** ①家庭の教育力のさらなる向上
 ②学校と地域が連携した取組の強化
 ③柔軟で弾力的な教育活動の展開

名 称	土曜振り返り学習(どよスタ)	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ
		希望者による任意参加
		対象学年
年間回数	3回～(各学期1回) (中はテスト前5回)	
内 容	<p>教員を目指す高校生や大学生、また、地域のボランティアが国語・社会・数学(算数)・理科・英語の補習を実施する。発展的内容については、大学院生等にも協力を依頼。</p> <p>◆「ふりスタ」の活用</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>※中1振り返り集中学習「ふりスタ」とは… 中学1年生の早期に基礎基本を徹底し、学習のつまずきの解消を図るとともに、主体的に学習に取り組む意欲・態目的度を身に付けさせるため、中学1年生を対象にした集中学習。小学校段階の基礎基本を徹底する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施時期：中学1年の早い時期(4～8月) ・実施教科：国語・算数等 </div>	
参加形態	地域・保護者(・教員) → 児童・生徒	
そ の 他	<p>○1教科当たりの授業時間は20～40分等、柔軟に調整</p> <p>○参加率を上げるため、補習時間前に映画などを上映したり、部活動開始時間前に補習時間を計画する等の工夫</p>	

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆学習のつまづきを少しでも解消することが可能 ◆放課後に実施していた補充学習を土曜日に移動することにより、平日の放課後を有効に活用することができる。 ◆ボランティア、補助者等の人材確保が平日よりも確保しやすい。 	<ul style="list-style-type: none"> ◆北部地域ではボランティア、保護者等の人材確保が困難 ◆振り返り学習の必要な生徒が参加するとは限らない。 ◆自主参加であるため、参加率向上の工夫が必要

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 補習を行う「教員を目指す高校生や大学生、地域のボランティア」を活用することや事前の打ち合わせを効果的に重ねることにより、教員の負担軽減につながる。 ○ 中1振り返り集中学習に取り組んでいる学校は、ノウハウを活かして教員の負担軽減を図ることができる。

- C-4 ①家庭の教育力のさらなる向上
②学校と地域が連携した取組の強化

名 称		文化・スポーツ交流	
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		対象学年	(幼)、小、中、高 全学年
		年間回数	年1～9回程度 (最大月1回)
内 容	<p>1 部活動体験教室 中学生や高校生が地域の園児や小学生と、部活動指導や運動遊びを通して交流を図る。</p> <p>1-①園児や小学生を中学校や高校に招待 1-②中学生や高校生が幼稚園・小学校に出向き、出前教室を実施 1-③種目ごとに小学校(幼稚園)または中学・高校のそれぞれの施設で実施</p> <p>2 地域合同クラブ 中学生や高校生が地域住民や地域クラブ等と合同で、練習や簡易ゲームを通じて交流する。</p> <p>3 発表会・公演会等 文化系部活動の練習成果(体育祭・文化祭での活動含む)を、地域の保育園や小学校、公民館等で発表。コンサート、茶会、演劇公演など。</p>		
参加形態	生徒・教員 → 園児・児童・保護者・地域		
その他	○活動している部活動単位で参加し、活動時間は2～3時間程度		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆地域住民との交流により、新たな人間関係やコミュニケーションづくりの機会となる ◆園児、児童、生徒間の異世代交流により、子どもたち同士の連帯感の醸成に寄与 ◆地域の体育・文化活動の活性化に寄与 	<ul style="list-style-type: none"> ◆施設等の問題から大規模校での実施困難 ◆園児、小学生、地域住民に対する安全配慮 ◆中・高の部活動に参加していない生徒への対応 ◆安全面に配慮したスペース確保 ◆中学1年生の参加は園児、児童への指導役としては困難 ◆指導者間の意思疎通

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 部活動指導であれば、教員全体としての負担は少ない。 ○ 小学生を引率する教員は、その小学生の在籍校が授業見学を学校行事として位置づけることで、週休日の振替等が可能となり、勤務時間増となる負担感は少なくなる。

C-5

- ①家庭の教育力のさらなる向上
- ②学校と地域が連携した取組の強化

名 称	〇〇中学校「絆」祭り		
教育課程内外の位置付け		児童・生徒の参加イメージ	
		希望者による任意参加	
		対象学年	小、中 全学年
		年間回数	
		1回	
内 容	<p>中学校区内の小中学校のPTAや町内会などが連携し、模擬店等さまざまな催しを中学校を会場として開催</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆ステージ発表 <ul style="list-style-type: none"> ・児童・生徒が部活動や文化祭等で取り組んだ内容の発表 ・PTAや地域の団体等によるコーラス等の発表 ◆PTAや町内会による模擬店、リサイクルバザー、制服交換会（中学校）等 ◆地域のボランティア団体等によるブース ◆地域の文化的活動を実施している団体（PTA含む）の発表会等 ◆各小中学校のブースを設け、各学校概要・取組紹介 		
参加形態	保護者、地域、児童・生徒、教員		
そ の 他	<ul style="list-style-type: none"> ○教員は運営スタッフとしては最小限の関与 ○地域の回覧板等を通じ、幅広く広報 ○地元企業や高校、大学なども参加を呼びかけ 		

期待される効果	実施上の課題
<ul style="list-style-type: none"> ◆異世代交流が促進される ◆小中連携の強化を図ることができる ◆学校と地域社会の連携強化を図ることができる 	<ul style="list-style-type: none"> ◆財源や運営スタッフの確保 ◆児童・生徒の参加率をあげる方策の検討 ◆発表等のない児童・生徒への対応

教員の勤務負担軽減の観点から
<ul style="list-style-type: none"> ○ 学校教育活動ではないので、公務としては位置づけられない。 ○ 児童生徒の発表の指導、会場準備、後片付けなど教員の係わりは最小限とすることで、負担感は少なくなる。